

新しい、繊維造形を追求

県立大 草間名誉教授と島田教授に聞く

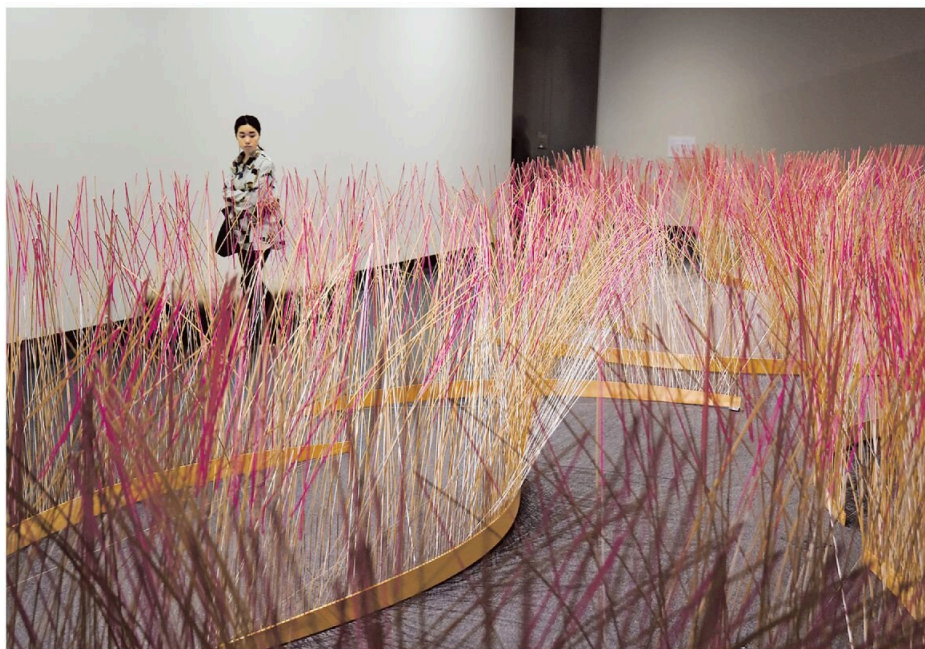
日本のファイバーアート（繊維造形）の先駆者だった元岡山県立大教授の小林正和さん（1944～2004年）の回顧展「小林正和とその時代―ファイバーアート、その向こうへ」（山陽新聞社など共催、26日まで）が県立美術館（岡山市北区天神町）で開かれている。同大で作家仲間として切磋琢磨した草間喆雄名誉教授（78）＝赤磐市＝と島田清徳教授（59）＝総社市＝に糸の表現の可能性を求め続けた小林さんとの思い出を聞いた。（小若菜美）

小林さんは、京都市に生まれ、大学卒業後の1966年に地元のお舗織物会社に就職。当時の欧米で盛り

上がったファイバーアートに刺激を受け、従来の織物の概念にとらわれない新しい繊維造形を志してい

く。

織物会社で同僚だった草間さんは「ずっと親友であり、ライバルだった」と目を細める。二人は会社の資料室にあった海外の専門誌でファイバーアートを知り、細野尚美さん（後の小林さんの妻）を加えた3人で、71年に京都市で初の作品展を企画。さまざまな糸を用いた立体作品で注目を集めた。「出品作を考えていた時、小林さんが僕の前



小林さんの独創的な繊維造形作品を集めた会場。代表作の「KAZAOTO」（1987年）は竹ひごに張った糸が風に揺れる稲田を連想させる



小林作品の前で「他の人とは違う視点で気づきやヒントを与えてくれた」と振り返る草間さん（左）と島田さん

学外展に情熱 魅力広める

で日本の糸を引っ張ったり緩めたりして見せた。彼の創作の原点だったんじゃないかな」

その後、ともに会社を退職して作家の道へ。草間さんは渡米して現地の大学院でファイバーアートを本格的に学び、独自に活動。93年の県立大開学に伴い、デザイン学部教授として招かれた小林さんから「一緒にやろう」と誘いを受けた。

小林さんが、同じように声をかけたのが、当時、ファイバーアートの若手作家として活動していた島田さん。同大では、97年に始めた「学外展」に情熱を注いでいたと振り返る。地域の美術館やホールを借り、現代建築と融合する繊維作品を学生たちに考えさせた。「展示場所や周囲の環境を踏まえた作品づくりを経験させたかったのだろう」と島田さん。小林さん自身も、小学校の中庭に布地を縫い合わせた「茶室」を出現させるなど、実験的な創作を楽しんでいたという。

学外展は2004年に小林さんが亡くなった後も島田さんが引き継ぎ、12年まで継続。同大を卒業した若い作家たちも活動するようになり、県内の美術館やギャラリーでは、ファイバーアートの展覧会が度々開かれている。草間さんと島田さんは「小林さんの思いは今も岡山に息づいていませ」と口をそろえた。

素材に寄り添い緻密に表現——池田・前京都国立近代美術館副館長



「小林さんの存在があったから日本のファイバーアートが世界に出て行けた」と語った池田さん

独創的な造形作品で国内外の公募展で活躍した小林さん。81年に草間喆雄さんら仲間と共に京都市内に展示空間も含めて作品とする実験的なギャラリーをオープン。糸を張った竹ひごを稲に見立てて並べた「KAZAOTO」、滝のように天井から糸を垂らした「MIZUOTO」といったインスタレーションへと作域を広げていく。

晩年は屋外展示に挑み、白い布の屋根を浮かべた「NODATE」など、糸以外の素材にも目を向けたという。しかし、志半ばの60歳で逝去。池田さんは「この先にどんな展開を考えていたのか見たかった」と惜しんだ。（小若菜美）

「小林正和とその時代」展の企画に携わった池田祐子・前京都国立近代美術館副館長（現三菱一号館美術館長）は、県立美術館での記念公演で「コンセプト重視の海外作家に対し、小林さんは素材に寄り添うことで評価を集めた」と指摘。会場を彩る作品は、糸の「張る」「たゆむ」「垂れる」という性質を利用して作られており「作品づくりを数学的に捉え、シンプルなようで緻密に計算していた」と説明した。

1975年のポーランドの国際テキスタイル・トリエンナーレでは、たわんだ糸がさざ波を思わせるタペストリー「WIND」で最高賞に輝くなど、